新編 日本幻想文学集成

【全9巻】

●編纂●

池内紀
須永朝彦
種村季弘
橋本治
富士川義之
別役実
堀切直人
松山俊太郎
矢川澄子
＊
安藤礼二
諏訪哲史
高原英理
山尾悠子

四作家を増補、再編成した
愛蔵決定版!!

国書刊行会

【《新編・日本幻想文学集成》について】

《日本幻想文学集成》は、明治から現代までの物故作家のなかで幻想文学の視座より欠かすことのできない作家を選出しその作品を集大成した「文学全集」です。旧版は一九九一年に刊行が開始され、一九九五年に全巻が完結いたしました。

この度の《新編》は旧版の装を改め再編集して刊行するものです。旧版は一作家一巻の全33巻構成でしたが、《新編》は四ないし五作家を一冊に纏めました。あわせて、旧版刊行以降に物故した作家の中から安部公房・倉橋由美子・中井英夫・日影丈吉の四人を新しく増補、この増補巻（第1巻）の編集と解説には新たな四人の編纂者を迎えています。

全九冊からなるこの《新編・日本幻想文学集成》が、幻視の作家たちが備える幻想の特質をあますところなく伝えるとともに、文学作品だけが持つ愉しみを読者の方々に与えることを心より願っております。

二〇一六年　　国書刊行会

［表紙画］梅木英治《転生の刻》

現実の「外側」に立つこと

安藤礼二

類い稀なる資質をもった表現者たちは、現実の「外側」に立ち、他の誰もが目にすることのできなかった風景を見ることができるのだと思う。現実の「外側」に立つためには、逆に、現実から遊離してはならない。眼前に存在する「もの」を凝視して、その「もの」を通して、彼方の世界への通路をひらくのだ。真の幻視者とは、「幻」を見るのではなく、現実を「幻」に変えてしまえる存在であるはずだ。

それゆえ、幻想文学は、自明のジャンルを無化してしまう。旧版の「日本幻想文学集成」は、いわゆる純文学からエンターテインメントまで、マイナーからメジャーまで、真の幻視者たちからなる一つの系譜を打ち立てた画期的なシリーズであった。私は、松山俊太郎氏が担当した谷崎潤一郎と小栗虫太郎の巻からいまだに大きな影響を受けている。松山氏は谷崎の、そして小栗の文学の本質を語るとともに、なによりも自分自身の内奥の秘密までをも語ってしまっている。

今回、私が担当した安部公房の作品世界の核にも「幻視」の力がある。安部は、植民地・満洲という日本の「外側」に育ち、生涯、二度と戻れぬその「故郷」にこだわり続けた。安部にとって「故郷」は荒涼たる砂漠であるとともに、さまざまなものが一つに混じり合い、新たなものが生み出されてくる起源の場所だった。人間が森羅万象あらゆるものに変身する場所でもあった。その文学に秘められた可能性をあらためて抽出してみたいと思っている。

あんどう・れいじ　一九六七年生れ。文芸評論家。
主要著作――『神々の闘争』『近代論』『光の曼陀羅』『霊獣』『場所と産霊』『たそがれの国』『祝祭の書物』『折口信夫』他。

夜の夢こそ「リアル」

諏訪哲史

僕は作家のくせに、今まで完全な自然主義的リアリズム小説を書いたことがない。書こうとしても必ず破綻する。書きつつある現実的な物語のどこかに不意に裂け目が生じ、未知の奈落が口を開けるのだ。しかしその幻こそが僕の中での文学の本質、そして僕の生の「リアル」なのである。まさに「うつし世はゆめ　よるの夢こそまこと」（乱歩）である。

あの梅木英治さんの銅版画をカバーにあしらった白い叢書「日本幻想文学集成」をどれほど愛読しただろう。拙著『偏愛蔵書室』でも複数冊を挙げた。このシリーズは著名作家の通常の精華集とは異なる。幻想文学に精通した選者らによる、教科書的でない偏執的なセレクト、その天邪鬼な選択意図を開陳した解説まで含め、選者の編集自体の内に、既に倒錯した幻想性が孕み込まれているのである。

錚々たる先人編者たちの露払いよろしく、今回僕が仰せつかったのは日影丈吉である。解説を脱稿して感じたのは、彼の作家的肖像を描くことは不可能であるという諦念だ。二十面相ならぬ無面相。日影丈吉は自身が幾多の謎を巡るミステリ作家でありながら、彼という人間存在の謎だけは永久に解き明かしえぬよう鍵を懐にして昇天した怪人である。

人間風な架空キャラと戯れる「共感」が幻想と見做されている今世紀、幻想とは見知らぬ他者との想像を絶する「齟齬」であり、そこにこそ畏怖すべき異界が存在するという真実を前世紀の文学は教えてくれるだろう。

すわ・てつし　一九六九年生れ。作家。
主要著書――『アサッテの人』『りすん』『ロンバルディア遠景』『領土』『スワ氏文集』『偏愛蔵書室』他。

志はいつも新た

高原英理

「幻想文学」は現在、ミステリ・SF・純文学のように新人養成のための手段もそれに特化した発表媒体も持たない上、複数の専門的批評家が常に意見を対立させながら共存共栄するという状況にも遠いので、未だジャンルとは言えず、ただ、その名のもとに過去の文学作品を従来の文学史と異なった価値観によって拾い上げるための、批評上の手がかりであり続けている。

ならば今、できることは、その手がかりを用いて「幻想文学」たる作品を常に、新たに、名指し続け、その価値を提示し続けることである。よく伝えられるなら次世代の人々は、その営為を、ときに手本、ときに反面教師と見て、新たな方法と意志を育むだろう。

『世界幻想文学大系』と並ぶ『日本幻想文学集成』がこの展開に大きく貢献した企画であることは言うまでもない。文学史では言及されない作品、従来の価値観からは見いだせない価値を知る驚き・喜びとともに、もう一方で「これが幻想文学と言えるのか」「これにいったい何の意味があるのか」等々の疑問をもいだかせられる、そうした経験は自分の創作に多くのものを与えてくれたように思う。

今回、中井英夫の幻想小説選集が加わる。ここからもまた、ルーティーンな規範・前例主義・権威主義によらない、新たな定義、新たな問い、新たな視線を発生させうるならば望ましい。そんな志で私は今回の選と解説をひきうけた。

たかはら・えいり　一九五九年生れ。作家・文芸評論家。
主要著書――『神野悪五郎只今退散仕る』『抒情的恐怖群』『少女領域』『無垢の力』『ゴシックハート』『ゴシックスピリット』『月光果樹園』『アルケミックな記憶』他。

荒野より

山尾悠子

先の日本幻想文学集成刊行の折には定期購読を申し込んでいた。ちょうど地方で逼塞中だったという個人的事情もあり、毎回届けられる各巻は大げさでなく天上からの甘露の滴りとして受け止められた。未読の作家との出会いも嬉しいものだったし、また唯一の女性編者である矢川澄子氏の編と解説がとりわけ興味深く、大いに感銘を受けたものだ。――そしてめでたくもこの度の新編発刊となった訳だが、それでもこのことに全く触れずにおくのは無理がある。「何という女性率の低さ！」

物故作家のみを対象とする、という条件で近代日本幻想文学の系譜を振り返るならば、女性の存在感はこれほどまでに薄かったのか。「幻想」の規定によって見方は変わる。捉えかた次第で、森茉莉・野溝七生子・尾崎翠らのラインも充分「こちら側」のひとたちとなる。香気滴る彼女たちを加えても、なお荒涼と風の吹きすさんでいた荒野――思うところが多かっただろう矢川氏の名解説を読み直すと、感慨が深い。

そして倉橋由美子というひとは、様々な意味で「現代」女性表現者たちの孤独な先駆けであったのだなと、改めてそう思う。今回は幻想・架空の世界を扱った作品を重点的に読み返すことになったが、高校時代、箱入り本の『妖女のように』『聖少女』など抱いて布教活動に勤しんだことを思い出した。今の子たちは『酔郷譚』あたりを抱いているのだろうか。

やまお・ゆうこ　一九五五年生れ。作家。
主要著書――『夢の棲む街』『仮面物語』『オットーと魔術師』『角砂糖の日』『山尾悠子作品集成』『ラピスラズリ』『歪み真珠』他。

第1巻（第1回配本）

幻戯の時空

●虚構の論理で異世界を捏造する現代四作家

ISBN978-4-336-06026-6

安部公房［1924-93］ 安藤礼二 編

ふしぎな植物に変身したコモン君の話「デンドロカカリヤ」（初出雑誌版）。奇妙な味の恐怖小説「家」。文明批評的ＳＦ「鉛の卵」。『砂の女』の原型作品「チチンデラヤバナ」。ほか、「カーブの向う」「詩人の生涯」「ユーブケッチャ」の全7編の小説。言語論の極北「クレオールの魂」と「砂漠の思想」の2評論も併録。

倉橋由美子［1935-2005］ 山尾悠子 編

ＫとＬの眼の前で卵から生まれた両性具有者は内部に暗黒の宇宙を孕んでいた……（「宇宙人」）。内側へ内側へと下降螺旋をえがく寂滅の図書館の幻想「ある老人の図書館」。ほか、「囚人」「夢のなかの街」「隊商宿」「白い髪の童女」「虫になったザムザの話」「アポロンの首」等全10編。

中井英夫［1922-93］ 高原英理 編

世界一小さな密室に閉じこもる少年たちと月光魔人の話「卵の王子たち」。中世趣味・ゴシック嗜好が横溢する「薔薇の縛め」。現代から昭和初期へと逆流する時間を描く「星の砕片」。ほか、「火星植物園」「影の舞踏会」「薔薇の獄」「薔人」「幻戯」「日蝕の子ら」「銃器店へ」「夕映少年」等全14編。

日影丈吉［1908-91］ 諏訪哲史 編

破格のグロテスクと狂ったユーモアが全編を覆う「ある生長」。南仏の架空の町ヨンの時計塔を舞台にした「猫の泉」。怪談「浮き草」。ほか、「屋根の下の気象」「墓碣市民」「山姫」「こわい家」「壁の男」「さんどりょんの唾」「硝子の章」「かぜひき」「角の家」等全15編。

第2巻（第2回配本）

エッセイの小説

●小説なのかエッセイなのか？ 虚実のあわいを縫う迷宮

ISBN978-4-336-06027-3

澁澤龍彦［1928-87］ 富士川義之 編

虚空に飛ぶ能力を持った蹴鞠の名人の物語「空飛ぶ大納言」。魔道によって中国の皇帝が画の中に生きた自分の姿を見る「桃鳩図について」。ほか、「鳥と少女」「犬狼都市」「エピクロスの肋骨」「ダイダロス」「都心ノ病院ニテ幻覚ヲ見タルコト」「鏡と影について」「女体消滅」「画美人」「護法」全11編。

吉田健一［1912-77］ 富士川義之 編

奇想天外な食物幻想譚「饗宴」。飲み屋で偶然知り合った大男が突然大亀に変身する「海坊主」。ほか、「空蟬」「道端」「或る田舎町の魅力」「逃げる話」「沼」「邯鄲」「ホレス・ワルポオル」「酒の精」等全11編。

花田清輝［1909-74］ 池内紀 編

中世室町時代を舞台にして、考証と空想のはざまを自在に往還する「伊勢氏家訓」「開かずの箱」。数に取り憑かれた青年の話「七」。ほか、「林檎に関する一考察」「歌」「海について」「ものぐさ太郎」「石山怪談」「鏡の国の風景」「『ドン・キホーテ』註釈」「テレザ・パンザの手紙」等全16編。

幸田露伴［1867-1947］ 種村季弘 編

夢の中の生と生の中の夢が迷路の中で呼びかわす「土偶木偶」。魔界ファンタジー「新浦島」。ほか、「望樹記」「雪たゝき」「ウッチャリ拾ひ」。「神仙道の一仙人」「芳野山の仙女」等のオカルト随筆3編も収録。

第3巻（第3回配本）

幻花の物語

●美しく怪しく愉しい物語の無限空間

ISBN978-4-336-06028-0

谷崎潤一郎［1886-1965］ 松山俊太郎 編

西湖の畔に建つ不思議な別荘。美しい奴隷たちは主人の奇妙な生活を語り出す……（「天鵞絨の夢」）。支那趣味に彩られた謎の館に住む男の物語「鶴唳」。ほか、「夢の浮橋」「人魚の嘆き」等全5編。

久生十蘭［1902-57］ 橋本治 編

明治三十年、学侶山口智海は西蔵訳大蔵経を入手すべく単身鎖国状態のチベットに旅立った。密入国が発覚すれば、彼の前には狂信的なラマ僧の残虐な処刑が待っている……（「新西遊記」）。メドゥーサ号人肉事件を描いたノンフィクション・ノベル「海難記」。ほか、「新残酷物語」「奥の海」「うすゆき抄」「母子像」全6編。

岡本かの子［1889-1939］ 堀切直人 編

美貌の兄弟の心中を描いた耽美的な短篇「過去世」。水の世界の妖しさを描く「渾沌未分」。ほか、「蝙蝠」「夏の夜の夢」「上田秋成の晩年」「秋の夜がたり」「老主の一時期」「小町の芍薬」「狂童女の恋」「雪」等全16編。

円地文子［1905-86］ 須永朝彦 編

怪女岡本かの子を主人公にした「かの子変相」。宙に浮かんだ三島由紀夫の首と著者が対話を交わす「冬の旅」。アンドロギュヌス譚「双面」。他に、「二世の縁 拾遺」「春の歌」「花食い姥」「鬼」「猫の草子」全8編。

第4巻（第4回配本）

語りの狂宴

●騙りの力により宇宙を創出するめくるめく語り部たち

ISBN978-4-336-06029-7

夢野久作［1889-1936］ 堀切直人 編

少女の不可思議な予知能力を描いた「人の顔」。乗った船舶を必ず沈没させる奇妙な美少年の話「難船小僧」。謎の人形部屋の物語「白菊」。ほか、「死後の恋」「微笑」「卵」「童貞」「怪夢」「木魂」全9編。

小栗虫太郎［1901-46］ 松山俊太郎 編

中国辺境の人外魔境にいどむ「紅軍巴蟆を越ゆ」。韃靼海峡の暗黒地を踏破した男の冒険「海螺斎沿海州先占記」。苗族共産軍支配地域で起こった陰惨なる謎の密室殺人事件「完全犯罪」。全3編。

岡本綺堂［1872-1939］ 種村季弘 編

暗闇の中で両眼が青く光る怪奇な仮面の物語「猿の眼」。器物怪談「兜」。ほか、「鰻に呪はれた男」「影を踏まれた女」「魚妖」「火薬庫」「穴」「蟹」「置いてけ堀」「停車場の少女」「黄い紙」「蛆虫」「鎧櫃の血」全13編。

泉鏡花［1873-1939］ 須永朝彦 編

水辺で月光をすくう少女の怪異譚「光籃」。人間をさらった二人の天狗が皇室と将軍家の吉凶を占う「妖魔の辻占」。ナンセンス物語「雨ばけ」。ほか、「化鳥」「印度更紗」「伯爵の釵」「処方秘箋」「蠅を憎む記」「二世の契」「貴婦人」全10編の小説と戯曲「紅玉」を収録。

第5巻（第5回配本）

大正夢幻派

●大正幻想をバックボーンに異形の文学を形成した作家たち

ISBN978-4-336-06030-3

江戸川乱歩［1894-1965］ 別役実 編

大都会のビルのはざまで起こる妖しい月光の犯罪「目羅博士の不思議な犯罪」。望遠鏡を逆さに覗き人形と化した男の物語「押絵と旅する男」。ほか、「パノラマ島綺譚」「一人二役」「木馬は廻る」全5編。

稲垣足穂［1900-77］ 矢川澄子 編

美しい鉱物幻想譚「水晶物語」。異世界〈薄板界〉の消息を伝える「薄い街」。ほか、「青い箱と紅い骸骨」「リビアの夜」「飛行機物語」「放熱器」「白鳩の記」「かものはし論」「古典物語」「白昼見」全10編。

宇野浩二［1891-1961］ 堀切直人 編

ある洋館のみすぼらしい一室に自分の夢を培養する理想の場所を発見したひとりの男の物語「夢見る部屋」。ほか、「屋根裏の法学士」「人癩棚」「さ迷へる蠟燭」「清二郎 夢見る子」全5編。

佐藤春夫［1892-1964］ 須永朝彦 編

画家の私はアメリカ帰りの友人の提唱のもとに〈美しい町〉の構想を練る。東京のどこかに百軒ばかりの瀟洒な家々からなる夢のような理想の小市街を築きあげようというのだ……（「美しき町」）。長崎の魔窟を舞台にした探偵小説「指紋」。ドッペルゲンガー奇譚「奇妙な小話」。ナンセンス童話劇「楽しき夏の夜」。ほか、「黄昏の殺人」「月かげ」「薔薇を恋する話」等全9編。

第6巻（第6回配本）

幻妖メルヘン集

●遥かなるノスタルジーと夢魔を宿すメルヘン群

ISBN978-4-336-06031-0

宮沢賢治［1896-1933］ 別役実 編

ある日一郎君のところに届いた奇妙な手紙「どんぐりと山猫」。下手くそなチェロ弾き奏者と動物たちの物語「セロ弾きのゴーシュ」。ほか、「やまなし」「毒蛾」「インドラの網」「銀河鉄道の夜」「双子の星」「タネリはたしかにいちにち嚙んでゐたやうだった」「月夜のでんしんばしら」等全15編の童話。

小川未明［1882-1961］ 池内紀 編

金色に輝く輪を回す少年に導かれて死の国へ入っていく「金の輪」。疲労の砂漠から持ってきた砂で誰もが眠ってしまう「眠い町」。ほか、「黒い旗物語」「びんの中の世界」「赤いろうそくと人魚」「火を点ず」「初夏の空で笑う女」「薬売り」「野ばら」「牛女」「白い門のある家」「戦争」等、26編の童話と小説。

牧野信一［1896-1936］ 種村季弘 編

人形愛、望遠鏡、仮面――知的なユーモアとファンタジーが交錯する夢幻喜劇。恋愛小説の傑作「繰舟で往く家」。ほか、「痴酔記」「風流旅行」「鬼涙村」「バラルダ物語」「淡雪」「夜の奇蹟」等全10編。

坂口安吾［1906-55］ 富士川義之 編

秀吉の遺書の形をかりた「狂人遺書」。ナンセンス・ストーリー「風博士」。王朝物語「紫大納言」「夜長姫と耳男」「桜の森の満開の下」。ほか、「光と風と二十の私と」「私は海をだきしめていたい」等全8編。

第7巻（第7回配本）

三代の文豪

●明治・大正・昭和の四文豪の幻想

ISBN978-4-336-06032-7

三島由紀夫［1925-70］ 橋本治 編

戯曲・バレエ台本を含む9つの作品で、幻想的合理主義者ミシマの正体をさぐる。宮廷の優雅の化身とあがめられる美貌の御息所と高徳の老僧の恋の物語「志賀寺上人の恋」。ほか、「手長姫」「鴉」「中世に於ける一殺人常用者の遺せる哲学的日記の抜萃」「女方」「百万円煎餅」「大障碍」「憂国」等。

川端康成［1899-1972］ 橋本治 編

予知能力を備えた少女が登場する心霊物語「白い満月」。名作「眠れる美女」の原型「死体紹介人」。死後の霊とのかかわりを描く「死者の書」。ほか、「篝火」「十六歳の日記」の全5編を収録。

正宗白鳥［1879-1962］ 松山俊太郎 編

「アダム以来の美しいあなた。イヴ以来の美しいわたし」――妖しいラヴレターが次々と波瀾を引き起す恐怖小説「人生恐怖図」。稀代の妄想小説「冷涙」。百鬼夜行図の画家に起こる怪談「妖怪画」。全3編。

室生犀星［1889-1962］ 矢川澄子 編

金魚と老人の会話で構成されたシュルレアリスティックな小説「蜜のあはれ」。ほか、「三本の鈎」「魚になつた興義」「火の魚」「寂しき魚」「愛魚詩篇」「凍えたる魚」「七つの魚」「青き魚を釣る人」「老いたるえびのうた」等14編の小説・詩・エッセーが織りなす魚アンソロジー。

第8巻（第8回配本）

漱石と夢文学

●夢文学最初の名作を遺した漱石とその夢の軌跡

ISBN978-4-336-06033-4

夏目漱石［1867-1916］ 富士川義之 編

夢文学の傑作「夢十夜」。アーサー王伝説を踏まえたファンタジー「幻影の盾」「薤露行」。ゴシック幻想に彩られた「倫敦塔」。ほか、「琴のそら音」「カーライル博物館」「一夜」「変な音」等全10編。

内田百閒［1889-1971］ 別役実 編

大雨のなか皇居のお濠に突如として牛の胴体よりも大きな鰻が現れる……東京駅の改札を出ると丸ビルが跡形もなくなって空には奇妙な半弦の月がかかっている……無類の連作幻想掌篇小説集「東京日記」。SPレコードの怪異「サラサーテの盤」。ほか、「盡頭子」「件」「冥途」「昇天」「山高帽子」「青炎抄」「道連」「豹」「影」「狭蓬」全12編。

豊島与志雄［1890-1955］ 堀切直人 編

幽霊屋敷を描く都市幻想小説「白血球」。〈近代説話〉と銘打たれた「沼のほとり」「白蛾」。ほか、「或る女の手記」「どぶろく幻想」「霊感」「幻の園」「猫性」「都会の幽気」「道連」「怪異に嫌はる」等全13編。

島尾敏雄［1917-86］ 種村季弘 編

超現実主義的手法で夢の世界を記述した「夢の中での日常」。奇妙な市街を徘徊した果てに塔の中に異様なものを見つける「摩天楼」。架空地震小説「月暈」。ほか、「石像歩き出す」「勾配のあるラビリンス」「鬼剝げ」「孤島夢」「亀甲の裂け目」「死人の訪れ」「子之吉の舌」「むかで」「冬の宿り」等全13編。

第9巻（第9回配本）

鷗外の系譜

●テーベ百門の大都鷗外とその精神を継承する弟子たち

ISBN978-4-336-06034-1

森鷗外［1862-1922］ 須永朝彦 編

鷗外の作中もっとも怪異味が濃厚な「鼠坂」。怪談会を舞台にした「百物語」。ほか、「寿阿弥の手紙」「秋夕夢」「流行」「空車」等全11編。

芥川龍之介［1892-1927］ 橋本治 編

切支丹物「きりしとほろ上人伝」「じゆりあの・吉助」。ほか、「葬儀記」「田端日記」「藪の中」「毛利先生」「舞踏会」「庭」「彼」「トロッコ」「あの頃の自分の事」「蜘蛛の糸」「地獄変」「わが散文詩」「東京田端」等全16編。

中島敦［1909-42］ 矢川澄子 編

地下墳墓のミイラに前世の無限連鎖を見出す「木乃伊」。ほか、「狐憑」「山月記」「名人伝」「悟浄出世」「盈虚」「牛人」「李陵」「文字禍」等全13編。

神西清［1903-57］ 池内紀 編

応仁の乱に材をとった歴史小説「雪の宿り」。アンチSF小説「わが心の女」。ほか、「ジェイン・グレイ遺文」「死児変相」「夜の鳥」「ハビアン説法」「化粧」「三つの挿話」「水に沈むロメオとユリヤ」「青いポアン」全10編。

石川淳［1899-1987］ 池内紀 編

妖術により不老不死となった芸妓の奇譚「喜寿童女」。ほか、「怪異石仏供養」「瓜喰ひの僧正」「山桜」「ころび仙人」「かくしごと」等全13編。

「編者より読者へ」

――旧版の〈日本幻想文学集成〉内容見本小冊子（一九九一年）に掲載された文章の再録です。

再ビ読ム

池内紀

再読のおかしさ。

編むたのしみの前提であり、結果でもある。私が買って出たのは石川淳、小川未明、神西清、花田清輝の四人だが、若い自分が読んだ本を、一つ一つ再読した。読み直した。

かつて読み、感動を覚えた本が、年をへだてて手にとると、まるでちがった本に見えてきた。未知の作品としてあらわれた。

問題は本そのものではないのだろう。いわば未知の本を読み直すと同時に、未知の自分をも読み直したということ。若いとき、どうしてこう読まず、ああ読んだのか。なぜこれがわからず、どうしてこれを読みすごしたのか。再読するなかに気づかなかった自分があらわれる。そのおかしさ。

作品を仲立ちにした未知の男との出会いである。なつかしい本を鏡として、まるで見知らない一つの顔が、じっとこちらをにらんでいる。

いけうち・おさむ　一九四〇年生れ。文芸評論家・独文学者。

目も合はさでや世を明かすらむ

須永朝彦

森鷗外は綺想幻想を凝らした西洋の短篇を蒐め反訳して『諸国物語』を編んだ。そして『追儺』の中に「小説といふものは何をどんな風に書いても好いものだ」といふ一節を書き残してゐる。これを信奉したのが、鷗外の孫弟子を自認する佐藤春夫で、その春夫は確か「文学の極意は怪談である」と言つてゐる筈である。春夫の処女作は、犬が口をきく話であつた。犬と雷を怖がつた泉鏡花は江戸の草双紙を愛読し、大友の若菜姫もかくやと思ふばかりの美女を真央に据ゑた比類の無い美しき夢を掬び、綺想を綴つた。円地文子は幼少時に耽読した江戸の戯作のブラッディ・シーンを斥ける事なく、最後には宙に浮かぶ三島由紀夫の首と対話する小説まで書いた。

「幻の夢をうつゝに見る人は目も合はさでや世を明かすらむ」と詠んだのは、生涯行ひすますことの無かつた西行法師だが、囚はれ且つ憑かれてしまつた作家達の精粋を輯める事業に、いま連なり得たのは嬉しい。

すなが・あさひこ　一九四七年生れ。歌人・作家。

幻想からの逃走

種村季弘

すこしひねくれてみたい。

いかにも幻想文学らしい幻想文学が向こうからやってきたら、知らんぷりをしてやり過ごしたい、というほどの意味である。

リアリズムであろうが幻想文学であろうが、目の吊り上がったやつと付き合うのはごめんだ。いやにせかせかして気忙しい。そもそもそういうものから逃げ出した先に開けるのが、気忙しい流行現象とは別口にある幻想文学という領野だろう。

それに、是が非でも輸入物でなければ間に合わないわけでもないだろう。輸入物の旨味を受け入れるためにも、あらかじめこちらに素地がなくてはならない。SFもホラーも輸入されていなかった時代にも、自家製の夢見る装置はあった。幸田露伴の神仙譚があり、岡本綺堂の江戸昔語りがあり、牧野信一の遠眼鏡があり、島尾敏雄の夢旅行があった。

ここらでなら、やかましい「幻想文学」をしばし忘れてくつろげると思う。

たねむら・すえひろ　一九三三年生れ。二〇〇四年没。文芸評論家・独文学者。

大理石の色香
橋本治

私が編集を任された四人の作家――芥川龍之介・川端康成・久生十蘭・三島由紀夫は、皆堅牢な構成を持った作家だといってもいいと思う。合理的精神の持主というか理性的というか、ダンディというか、外見に気を使ったというか。ひょっとしたら神経症的と言うべきなのかもしれない。今気がついたことだが、私の担当作家は〝異端〟とされる久生十蘭以外みんな自殺している……。

まァ、そんなことはどうでもいいことだが、私としては死にそうにもない健全な知性、あるいは才知によって構成された大理石の神殿にどれだけ不思議な歪みが漂っているのかが知りたい。大理石の彫刻は人の視線によって濡れるような光沢を宿すと言うが、作家の理性も似たようなものだと思う。真面目だけが取柄の近代論理の中に、どれだけの色香が宿っているか、それが勝負どころだろう。

はしもと・おさむ　一九四八年生れ。作家。

幻想小説への招待
富士川義之

詩人の鷲巣繁男は選抜試験で「足切り」という野蛮な言葉が使われていることにいつも憤慨したという。「新聞で足切りという活字を目にしただけで、鷲巣さんの眼前には、むごたらしく両足を切断された人間のイメージが、まざまざと思い浮かぶのであるらしかった」（澁澤龍彦『マルジナリア』）。

幻想とは見えない世界をイメージすることである。現代ではこれが仲々難しい。鷲巣氏の話は、生産性や効率性や管理化を重視するあまり、見えない世界をますます見えにくくしている今の世を図らずも示しているようだ。幻想小説はこの見えない世界に深くかかわり、それを切断された両足のようにまざまざと見せてくれることを本分とする。そこに幻想小説の比類ない魅力があるし、晩年の吉田健一が小説は怪談につきると言ったのもそういう意味合いにおいてであった。漱石も安吾もこれには同意するだろう。「足切り」という言葉に不感症になっているあなた、あなたこそ幻想小説の劇場に招待されているのですよ。

ふじかわ・よしゆき　一九三八年生れ。文芸評論家・英文学者。

幻想の達人
別役実

ロック・クライミングの達人を評して、「あいつは岩のだまし方がうまい」という言い方がある。もちろん現実には、岩というものは決してだまされないものであるし、我々も、だまそうなどとは考えない。にもかかわらずこの達人は、それをだまそうとするのであり、すると岩も、だまされてしまうのである。つまりこれは、岩に対する人間独自の戦術と言うべきであろう。

そして同様に、幻想もまた現実に対する人間独自の戦術にほかならない。現実もまた岩と同様、冷厳な物理法則のみに支配されているかに見えるが、幻想の達人は幻想により、それを解体し、溶解し、その本来のものを確かめるのである。少くとも宮沢賢治、江戸川乱歩、内田百閒の各氏は、そのような意味での幻想の達人と言える。彼等の現実を取り扱う手つきは、ロック・クライミングの達人が岩を取り扱う手つきに似て、ひどくしなやかである。

べつやく・みのる　一九三七年生れ。劇作家。

「おたく」のリハビリのために
堀切直人

中学時代の私は文学少年というより、漫画少年、博物学少年であった。漫画の放逸な幻の流れに身を浸し、動植鉱物の蒐集にひたすら熱中していた。世態人情を写し出す文学の俗世界はむしろ苦手だったが、乱歩、朔太郎の幻想的短篇を入口にして、捕虫網を手にしたまま、活字の仄暗い洞窟内に潜入した。苦手のはずの文学に妙な横丁から近づいていったのだ。こうした接近法は教養主義全盛期には邪道めいていたけれど、今日ではかえって「おたく」青少年にとって、自己確認と伝統の発見とリハビリのための絶好の機会になり得るかもしれない。

私の担当した文学者の作物を今回、読み直して分かったのは、夢野久作も、岡本かの子も、宇野浩二も、豊島与志雄も、みな「白痴」の魅力にイカれているということだ。五、六歳の精神年齢のままストップしてしまった痴人こそは、彼らのファンタジーとユーモアのよって来る、懐しき故里であったのではなかろうか。

ほりきり・なおと　一九四八年生れ。文芸評論家。

集中して豪華に
松山俊太郎

谷崎潤一郎・正宗白鳥・小栗虫太郎の諸巻を分担するに当たっては、偏りを恐れず、従前の刊本に見られぬ有機的な配列を現出し、三家それぞれに固有な傾向の一つを、重点的に浮かび上がらせたい。

ほとんどすべて文庫本未収録の作品で構成することになるであろうが、落穂拾いとは無縁で、積極的な意図と選択の結果である。

谷崎氏の巻では、理想の女性と理想の状況のもとで暮らすという、根強い宿願の投影をたどり、アモーラルなモラリストとしての本領を開示する、「夢の浮橋」にいたる。

正宗氏の幻想を代表するのは、『日本脱出』であるが、長すぎるので、怪談風の短篇を集めることにする。冷徹さの醸し出す鬼気を読者各位とともに味わいたい。

小栗氏の場合は、角川文庫版『人外魔境』（折竹もの全十三話）を除く〈僻地冒険譚〉から、中国辺域を舞台とするものを採り、世外への切ない憧れと、架空の細部への飽くなき執着を検証してみたい。

まつやま・しゅんたろう　一九三〇年生れ。二〇一四年没。インド学研究家。

わがままごっこ
矢川澄子

読者というものはたいへんわがままで、とんでもない選り好みをしてくれる。雌伏十年、せっかく満を持したつもりの自信作が一顧も与えられなかったり、かと思うとある朝、目がさめてみたらベストセラー作家になっていたり、翻弄されるのはいつも書き手の方だ。

選者はいったい読者と作者との、どちらにより多く加担すればよいのだろう。

ボルヘスの《バベルの図書館》がおもしろかったのは、彼が終始、自分のなかの読者の立場に立って、極端な選り好みをしてみせてくれたことだった。その顰みにならうとすれば、これは読者としての初心に立還るよい機会かもしれない。

犀星、タルホの晩年の作品を、わたしは新作として発表と同時に読んでいる。敎には〈光と風と夢〉という題だけで恋着してしまった十代の思い出をもつ。作者の都合などはぬきにして、ここはひとつ、思いきりわがままをつらぬかせてもらおう。

やがわ・すみこ　一九三〇年生れ。二〇〇二年没。詩人・作家。

ユニークな日本文学全集!!

【本シリーズの特色】

1……明治以降現代までの物故作家の中から、幻想文学の小説家として重要な37人を選び、短篇小説を中心にその精粋を9巻で構成しました。

2……13人の編纂者が各作家を担当する責任編纂制で、文庫等に未収録の埋もれた名品、知られざる傑作も数多く収めています。また、各巻には編纂者による斬新な解説も収録しています。

3……読みやすい一段組み。原作者の文章をあやまりなく伝えるため表記は原文通りとし、振りがなを多く加えて読者の便を図りました。

4……愛蔵にたえる堅牢豪華な造本。各巻には幻想画家梅木英治の描いた版画（メゾチント）を数点収録しました。

●造本・体裁●
A5判／上製カバー装
各巻平均700頁／本文12・5級一段組み
●装幀●
柳川貴代（Fragment）

●第1回配本●第1巻
「安部公房／倉橋由美子／中井英夫／日影丈吉」
【刊行記念特別価格】
定価：本体5000円+税
2016年6月23日発売

●第2回配本●第2巻
「澁澤龍彦／吉田健一／花田清輝／幸田露伴」
2016年8月発売／定価：本体5800円+税
以降、巻数順に隔月刊行予定
完結予定／2017年10月
第3回配本以降各巻予価：本体5800円+税

国書刊行会 〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15
電話：03-5970-7421　ファックス：03-5970-7427
http://www.kokusho.co.jp　e-mail：sales@kokusho.co.jp

帖合・書店印

申込書

国書刊行会
新編・日本幻想文学集成【全9巻】の定期購読を予約します。

お名前

ご住所

お電話

＊必要事項をご記入のうえ、書店へお渡しください。

【全巻購読者特典案内】

梅木英治画の絵葉書33枚セット

全巻購読の読者にもれなく進呈

［内容］梅木英治（1951-2009）が旧版《日本幻想文学集成》のカバーのために描き下ろした画を使用した絵葉書33枚セット。

＊

《新編・日本幻想文学集成》（全9巻）を全巻購読された方々に、もれなく無料で差し上げます。
下記の方法でご請求下さい。ご請求後、2か月以内にお届けします。

＊

［請求方法］《新編・日本幻想文学集成》の配本開始後、各巻の帯に刷り込まれる特典シールを切り取り、全巻分の計9枚を郵便はがきに貼って、ご住所・ご氏名を明記の上、「国書刊行会営業部　日本幻想文学集成係」へお送りください。
請求締め切りは最終回配本の6か月後とします。

《新編・日本幻想文学集成》全巻構成

【第1巻】幻戯の時空
安部公房／倉橋由美子／中井英夫／日影丈吉
ISBN978-4-336-06026-6
定価：本体5000円+税［刊行記念特別価格］

【第2巻】エッセイの小説
澁澤龍彦／吉田健一／花田清輝／幸田露伴
ISBN978-4-336-06027-3
定価：本体5800円+税

【第3巻】幻花の物語
谷崎潤一郎／久生十蘭／岡本かの子／円地文子
ISBN978-4-336-06028-0

【第4巻】語りの狂宴
夢野久作／小栗虫太郎／岡本綺堂／泉鏡花
ISBN978-4-336-06029-7

【第5巻】大正夢幻派
江戸川乱歩／稲垣足穂／宇野浩二／佐藤春夫
ISBN978-4-336-06030-3

【第6巻】幻妖メルヘン集
宮沢賢治／小川未明／牧野信一／坂口安吾
ISBN978-4-336-06031-0

【第7巻】三代の文豪
三島由紀夫／川端康成／正宗白鳥／室生犀星
ISBN978-4-336-06032-7

【第8巻】漱石と夢文学
夏目漱石／内田百閒／豊島与志雄／島尾敏雄
ISBN978-4-336-06033-4

【第9巻】鷗外の系譜
森鷗外／芥川龍之介／中島敦／神西清／石川淳
ISBN978-4-336-06034-1